

テンシャン山脈に生息するアルガリ (*Ovis ammon*) の行動調査と 保護管理上の問題点

○泉山茂之(信州大・山岳科学研究所)・Maksat Anarbaev(キルギス国立山岳地域開発センター)

キルギス族は古くからヒツジやヤギの牧畜で生計を立ててきた。1991年の独立後、政権が安定しなかった理由の一つが、キルギスの国家を支える財源が金鉱山などに限られ、貧困の解消が遅々として進まなかったことにある。しかし、独立後キルギス政府は自然保全区域を設定し、自然環境保全の政策実行についても努力を進めてきた。イスラム教の渡来前から、キルギス族は山の中には神が住むと考えてきた。山の中に住む神は「Kaiberen」と呼ばれ、有蹄類の姿をしていて、現在の小学生の教科書にしばしば登場する。「Kaiberen」の主はヒツジの原種とされるアルガリ (*Ovis ammon*)である。アルガリはIUCN (International Union for Conservation of Nature) のレッドデータブックにより絶滅危惧種に指定されている。しかし、厳しい政府の財政により、現在もトロフィーハンティング (Trophy hunting)の対象となっている。海外の富裕者が、人々が神として大切にしてきたアルガリをトロフィーハンティングのよる射殺により得た収入によって、保全区域の運営が進められている。最も重要な問題は、アルガリがどの地域にどれだけの生息数があり、その個体群動態が全くわかっていない中で、やみくもにトロフィーハンティングを継続することにある。本研究はキーストーン種であるアルガリを研究対象とし、アルガリの行動圏、季節的環境利用や移動経路などの生態をもとに、保全区域の線引きが適切であるかなど、保全区域のありかたについて具体的な提言を行うことを目的に実施した。

本調査ではテンシャン山脈中部のサリチャット・エルタシュ自然保全区域に生息するアルガリを対象に、2009年3月27日～4月4日に予備調査を実施し、サリチャット・エルタシュ2009年10月28日から2014年5月17日までに本調査を実施した。

調査では麻酔銃により11月1日にメス個体を捕獲した。捕獲個体の体重は65kg、角からは推定8才のオトナメス個体で、10頭の群れであった。捕獲個体にはGPS首輪を装着して放獣した。GPS首輪からは衛星通信を通じてE-mailによりアルガリからの位置データが送信された。位置データをもとにアルガリの位置と移動経路を地図上に作図した。この後も3頭を捕獲しGPS首輪を装着したが、いずれも放獣後まもなくオオカミにより捕食された。

GPS首輪を装着した個体からは位置データが送信された。3ヶ月後個体は動かなくなり、その後の現地調査においてオオカミにより捕食され死亡したことを、死体の状況により確認した。冬期間、メス成獣と亜成獣による10頭の群れは、溪谷を約20kmにわたり移動し、河床を中心とした行動圏であることが明らかになった。調査結果からは、サリチャット・エルタシュ自然保全区域においてアルガリの保護管理を行う上で、以下のような問題点があると考えられた。

1. 保全区域の面積が狭こと。アルガリの保護管理を実施する上で保全区域の面積の拡大が必要である。越冬期には土地利用が河床付近に集中し行動圏が最も縮小する時期と考えられることや、群れサイズが小さい10頭の群れにおいても行動圏は広大であることから、多くの生息個体が保全区域と保全区域に接するトロフィーハンティング実施区との境界を行き来して生息していると考えられる。

2. 保全区域に接する地域での金鉱山の開発が進められている。議会制への移行により保全区域内での採掘権の譲渡は延期となったが、中止には至っていない。金鉱山の開発は鉱毒の河川への流入など周辺の住民との衝突も発生している。

3. 保全区域が水源となり中国へ流れ下るKum aryk - suu川の下流において、3つのダム建設の計画が進められている。ダムの湛水域が保全区域に及ぶことで、河床周辺の水没により、アルガリの越冬地の消失が懸念される。